

PAR-11

AWS 技術者コミュニティを 内製化してみた！2,000 名が参加する TIS 流社内技術者コミュニティ活用術

横井 公紀

TIS株式会社

IT基盤技術事業本部 IT基盤技術事業部

IT基盤ビジネス推進部

主査

中澤 義之

TIS株式会社

IT基盤技術事業本部 IT基盤技術事業部

IT基盤コンサルティング部

シニアテクニカルエキスパート



本日のセッションは、二部構成となります。

第1部

社内AWS CCoEと技術者コミュニティの誕生で
老舗の大手SIerに起きた化学反応とは？

第2部

CCoEと技術者コミュニティが、DX推進の鍵になる！
ユーザー企業の内製化支援事例をご紹介します

第1部

**社内AWS CCoEと技術者コミュニティの誕生で
老舗の大手SIerに起きた化学反応とは？**

横井 公紀 (よこい きみのり)

TIS株式会社 IT基盤技術事業本部

IT基盤ビジネス推進部 主査

AWS Partner Ambassadors 2019-2021 選出

略歴

1986年: 愛知県名古屋市に生誕

2011年: 新卒でTIS名古屋本社に配属

2013年-2017年: AWS開発担当、リーダー、プリセールス歴任

2017年: TIS東京本社に異動、金融向けAWS運用基盤の開発リーダー

2018年: AWSビジネス推進チームリーダーとして現業務へ

社内AWS技術者コミュニティ運営開始

2019年: AWS CCoE正式発足、AWS Summit に初登壇

AWS Partner Ambassadors に初選出

2022年: AWS CCoEリーダーとして、全社のAWS利用促進による
ビジネス拡大と、エンジニアの先鋭化を目指した取り組みを推進中



AWS認定資格 全冠保有 (ALL Certified Engineers)



長年AWSに取り組む中で直面した「ビジネス上の課題」と「技術上の課題」を一気に解決したのが、**CCoE** と **社内技術者コミュニティ** でした。

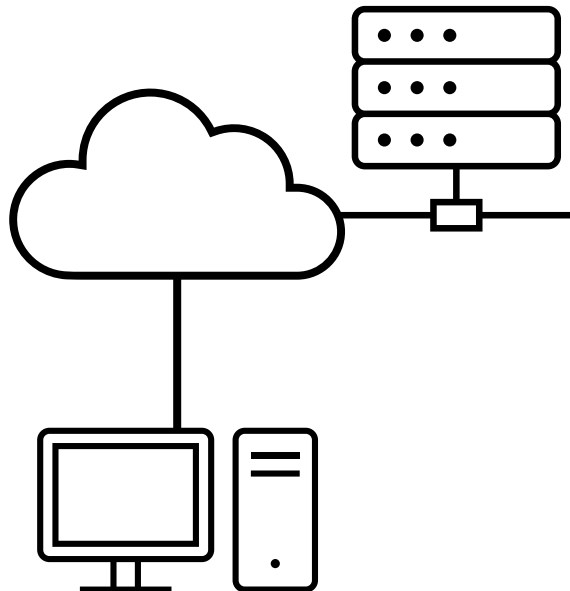
第1部では、TIS社内での設立背景から成功事例までを、余すことなくご紹介します。

	背景	<ul style="list-style-type: none">クラウド利用の成り立ちAPNパートナーとして技術者集団として
	課題	<ul style="list-style-type: none">インフラエンジニアから、アプリエンジニアへの広がりビジネス、サービス、育成、障害対応、セキュリティ新しい働き方への対応
	実践	<ul style="list-style-type: none">CCoEの設立AWS技術者コミュニティの設立情報共有拠点・人的交流拠点への発展
	成功	<ul style="list-style-type: none">課題解決力の向上開発力向上組織の壁を超えた一体感の醸成

AWS (クラウド) 利用をめぐる背景

2000年代後半の黎明期には「**クラウドコンピューティング**」という言葉でよく耳にしていたと思います。

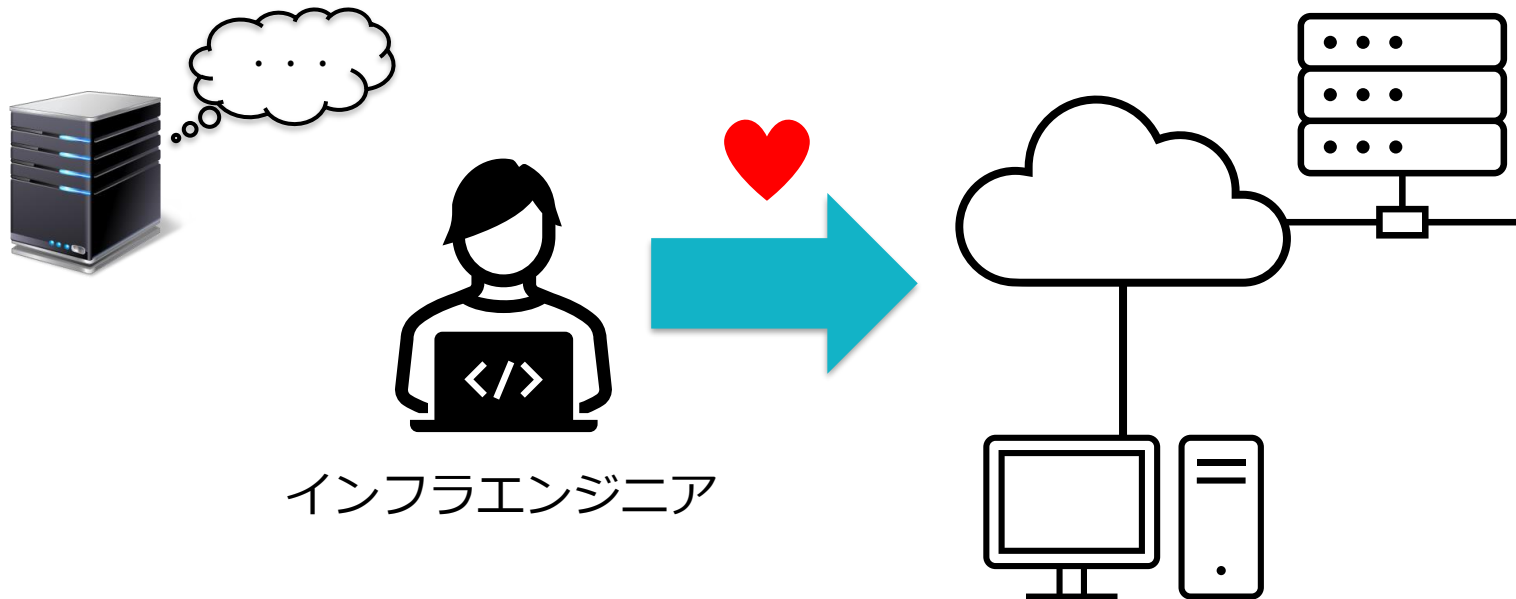
このコンピューティングを実現する装置が、物理から仮想に置き換わり、更に自社から手離れしていきました。



誰が最初にクラウドを使い始めたのか

コンピューティングを実現する装置を自社に構築する役割を持っていたのは、いわゆる「インフラエンジニア」と呼ばれる人たちでした。

インフラエンジニアが、既存技術に代わって、クラウド(AWS)を使い始めました。
これが、全ての始まりです。



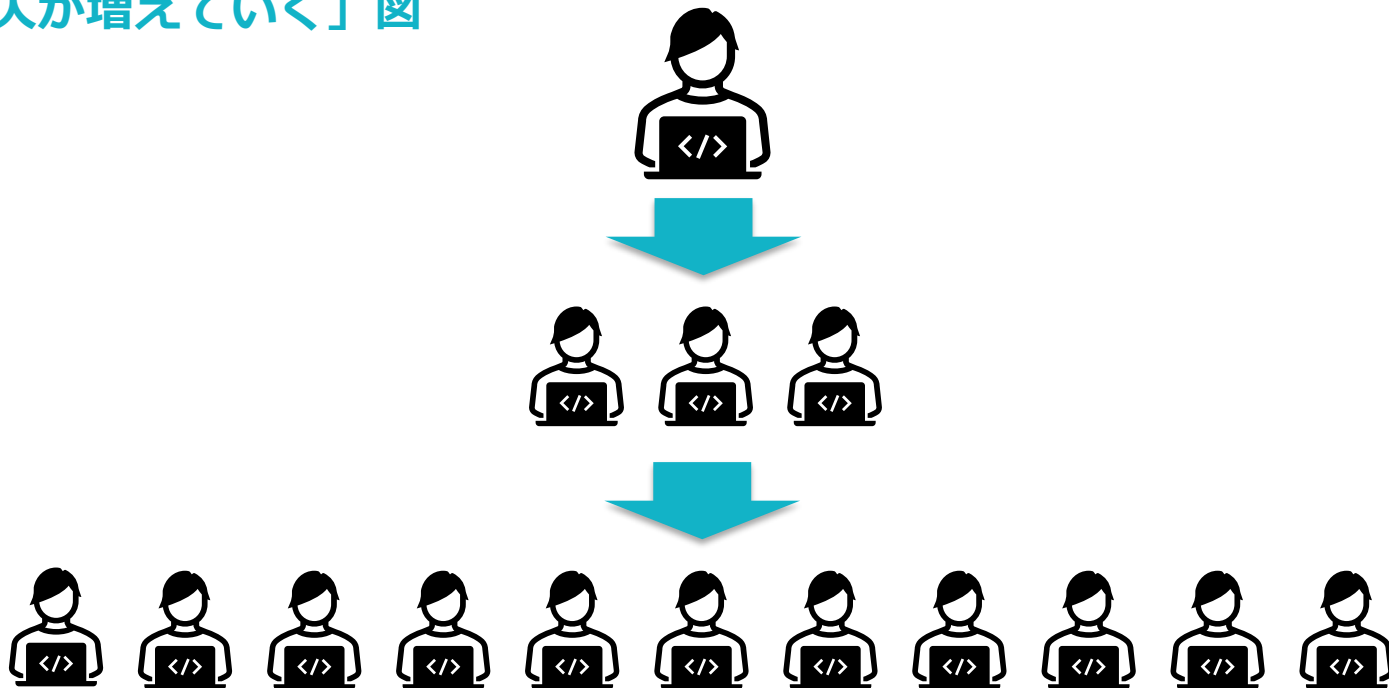
TISは、「AWSプレミアティア サービスパートナー」の1社です。
AWSのパートナーには様々なベネフィットがあれば、義務もあります。
全てのメンバが、これらを意識して、業務に取り組む必要があります。

ポイント

- **ビジネス推進の前提として、AWSパートナーネットワーク(APN)に登録する**
- **APNに登録していると、様々な恩恵を受けられる**
- **APNでは、AWS社が定めるガイドラインやルールがある**

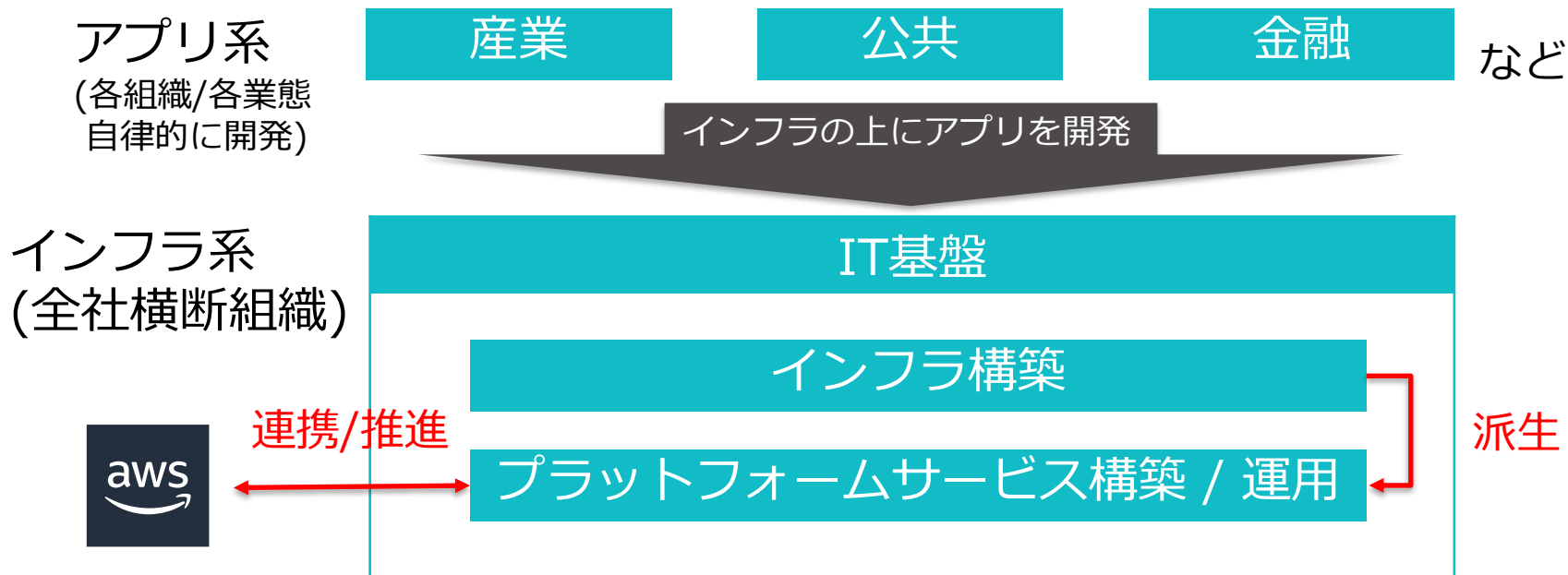
TISはSIerとして、お客様のシステム構築・運用を支援する立場です。
各PJで得られた技術的ナレッジは、人づてで脈々と継承されています。

「できる人が増えていく」



AWSビジネス推進上、現れた課題

AWSの利用は、インフラエンジニアを擁する「IT基盤」の1部門からスタート
お客様向けの開発・運用をしながら、各所の支援に回っていました



VPC・EC2・RDS・S3くらいしかなかった時代は、これでも良かったのです
しかし、Lambda等のアプリ寄りのサービスが登場すると、インフラ系部門の
経験値では、支援が難しくなり始めます



- AWSのビジネスを最初に始めた部門が、リセール（再販）の予算達成の責任を持ったことから「**主管部門**」と呼ばれるようになりました。
- 「主管部門にAWSの事例があるはず」と広まり、問い合わせや支援要請が多発するようになりました。
- 自部門の少人数の間では理解されていた、パートナー制度上のお作法を他部門にもきちんと守らせる必要が出てきました。
(サポートに関するパートナーの責任など)
- エンジニア育成や資格取得に関する問い合わせも多発するようになりました。

本質的には、戦略の練り直しが必要となり、以下全ての課題解消が必要となりました

- **AWS社とのリレーションシップにおける課題**
- **ガイドライン (利用方法) の周知・啓蒙に関する課題**
- **ナレッジ (技術情報) の共有に関する課題**
- **セキュリティに関する課題**
- **エンジニア (技術者) の交流に関する課題**

AWS社とのリレーションシップにおける課題

- APNのガイドラインやルールを守らせるための組織が必要
- APNでもらえる恩恵を各部門に配布するための組織も必要

ガイドライン (利用方法) の周知・啓蒙に関する課題

- 問い合わせ窓口を置くだけでは、体力的にも全社を支えられない
- 野良利用はあらゆるAPNの条件にカウントできず、ルールで要禁止
- アプデや廃止等の重要な情報は、一斉同報で提供すべき
- 極力人手を介さずインタラクティブに情報提供する仕組みが必要

ナレッジ (技術情報) の共有に関する課題

- 公式のAWSサポートに対し、何度も同じ問い合わせの繰り返し
- 全ての分野に答えられるスーパーマンは限定
- 技術的な質問窓口を集約し、有志でも解決できる仕組みが必要
- 各々の組織にAWSのナレッジが溜まっていくが、共有は困難
- 各組織から技術情報を吸い上げ、共有する仕組みが必要
- そもそも組織の壁をなくし、風通しを良くする仕組みが必要

セキュリティに関する課題

- 自由に利用させた結果、セキュリティインシデントに直面
- セキュリティインシデントが発生すれば、業務が止まってしまう
- 誰もがセキュリティに詳しいわけではない
- **最低限のセキュリティを半強制的に守らせるための仕組みが必要**

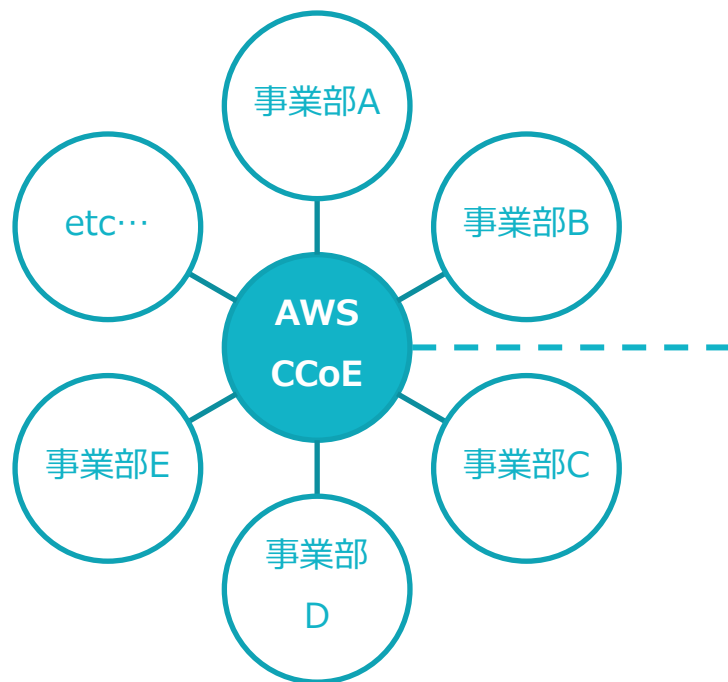
エンジニア (技術者) の交流に関する課題

- ・ 人と人との繋がりから生まれるイノベーションやビジネスがある
- ・ 困ったときの助け合いも、人と人との繋がりがあれば容易い
- ・ 勉強会やLT大会から生まれる関係も大事にすべき
- ・ 技術者同士が自律的に交流するためのプラットフォームが必要
- ・ オンラインでも組織を超えて交流できるプラットフォームが必要
(COVID-19流行下でも人と人との繋がりを分断しない)

CCoE、そしてAWS技術者コミュニティの設立

2019年4月の組織改正で設立

TISでは「**全社のAWS利用を促進し、AWSビジネスの拡大を狙う組織**」と定義



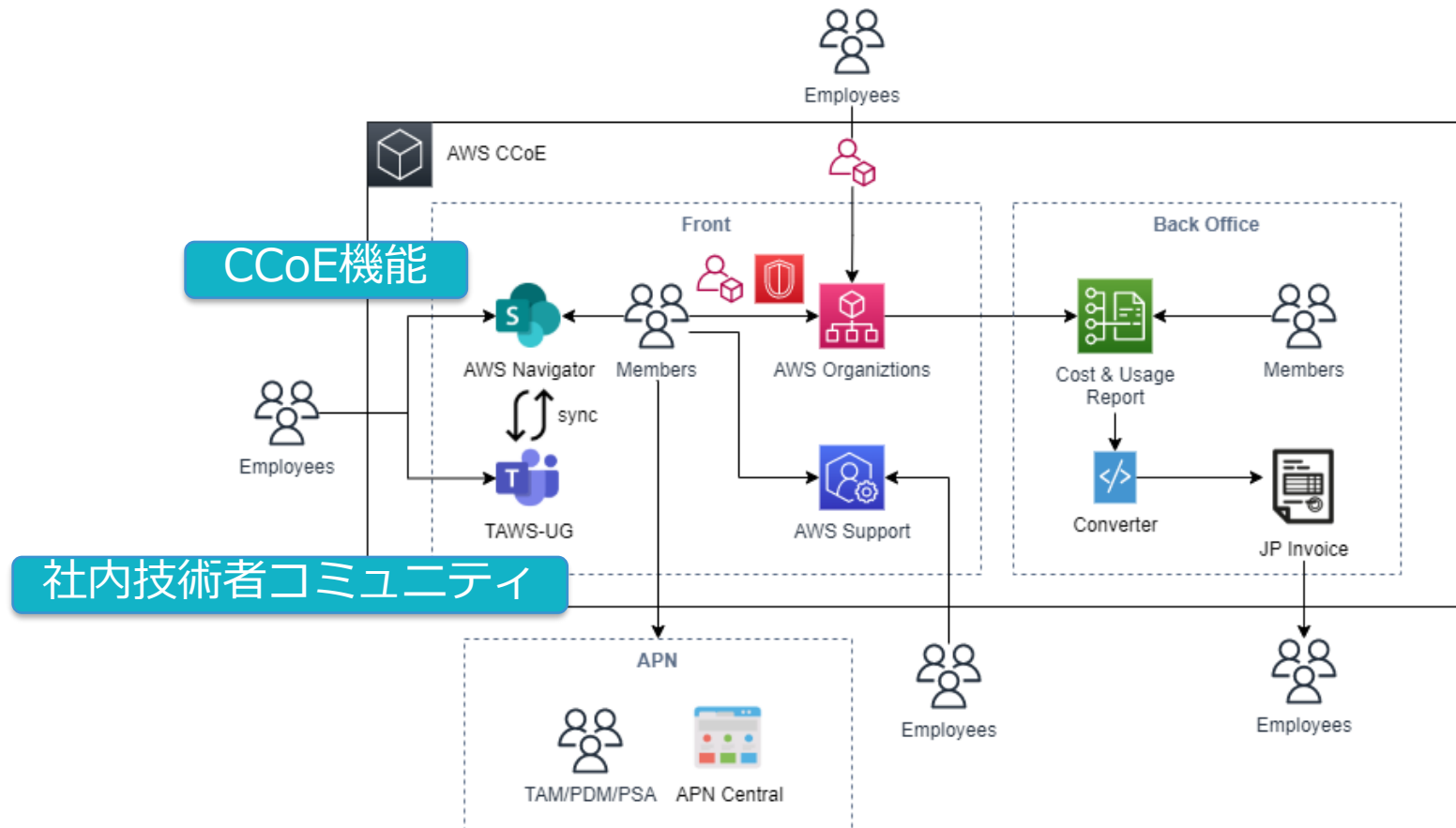
AWS CCoE

フロント

- APN特典の配布
- 育成施策の旗振り
- 再販・サポートサービス
- アカウント発行
- 技術者コミュニティ運営
 - 利用方法啓蒙
 - ナレッジ集積と配布
 - 重要アップデート報知

バックオフィス

- 定型業務
- 請求明細の作成
- 予算管理
- 収支報告作成





**AWSアカウント発行時に、利用者に対して絶対に守らせたい
最低限のセキュリティ設定を、CCoEで一律有効化して提供
「セキュリティプリセット」**



AWS CloudFormation



AWS CodeCommit



AWS CodePipeline



AWS CodeBuild

追加設定

その他
付帯サービス設定

ロギング等設定

ガードレール(追加)

ガードレール(SCP)

素のAWSアカウント





- 最低限守らせたいセキュリティ等をCCoE側で設定した上で
各部門にAWSアカウントを渡す
- その他、各種サービス/ツール類もプリセットして展開
- 守るべき事を確実に守らせつつ、
各部門は各々の開発に集中

AWSの開発・運用・エンジニア育成等に関するナレッジを集積したポータルサイトであり、**CCoEが全社員に対して発信したい情報の集合体**



AWS Navigator

本ナビゲーターの全てのコンテンツは、Teams「TAWS-UG」に参加している状態で閲覧可能です
まずは「ガイドライン」をお読みいただき、適切・適正にご利用ください

AWSを提案・利用する前に

-  お客様向けAWS提供ガイドライン
-  社内向けAWS利用ガイドライン
-  予めAWSサービス障害に備えるには？
-  AWS-AXION (AXIONポータル)


【必読】サポート起票の前に

-  AWSサポート起票ルール・作法
-  AWS公式・技術的なお問い合わせに関するガイド...

【営業/提案】AWS紹介資料

-  AWS取り組み資料・紹介資料
-  AWS社の戦略資料

AWSアカウント付帯機能

-  セキュリティリセット

AWS業界別ナレッジ

-  金融系技術資料

AWSエンジニア育成施策

-  AWS育成関連資料
-  AWS勉強会カレンダー

AWS技術系資料

-  AWS技術資料
-  AWS移行技術資料
-  エンタープライズ定例会資料
-  AWS New Service Update



目次

- PCIDSS関連
 - PCI DSS on AWS セミナー資料
 - セキュリティリセット (PCIDSS対応) 仕様書
 - PCI DSS スコーピングおよび AWS 上で仮想化環境のためのアーキテクチャの設計資料
- FISCR関連
 - FISCR 6版 (金融庁版) 月報、解説書
 - AWS FISCR 実証実験結果報告リリース および 参考文書
- その他金融関連資料
- 関連記事

金融系ナレッジ

PCIDSS on AWS セミナー資料

Ver. 20231204



育成カレンダー

AWS勉強会カレンダー （イベントカレンダー）											
 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門
 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門
 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門
 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門
 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門
 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門
 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門
 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門	 AWS 入門

他にもたくさんあります

JAWS-UGっぽいものを、TIS社内で内製化することで、エンジニア間の交流を活性化。
完全プライベート活動で、名前は「**とーずゅーじー**」と読むことにしています。

きっかけや発想は、至って単純！

JAWS DAYS 2021 参加者：日本全体から約4000人

これに対し

**TIS社員：連結21,817名、単体5,838名
(2021/3/31時点)**

つまり、TIS社員の多くがAWSに関心を持ち、やる気になれば
JAWS-UG以上の技術者コミュニティを社内に作ることができるのである

JAWS-UGっぽいものを、TIS社内で内製化することで、エンジニア間の交流を活性化。完全プライベート活動で、名前は「**とーずゅーじー**」と読むことにしています。



- **雰囲気を出すためにJAWSに名前を似せ、ロゴを作った**

- ログはあらゆるアイコンにしやすい、正方形タイプ
- 色はAWSっぽいオレンジで、クラウドっぽさも出した

- **コミュニティを広めるために、社内で年間20回の勉強会開催！**

- 2週間に1度、勉強会を実施した月もあった
- CCoEがあらゆる部門に足を運んでスカウト活動して登壇者を募った

- **Microsoft Teamsにオンラインコミュニティ設立！**

- 組織の壁を超えた案件相談が実現！
- **【POINT】AWS Navigator (SharePoint) の閲覧権限を、Teams参加者に限定**
 - SharePointを読まないアカウント発行手順や契約書の入手ができないようにして半強制的にメンバを増員 → **約2000名の社員が参加する大所帯に！**

CCoEとAWS技術者コミュニティがもたらした成功事例

従来は、組織間の相互支援は、主に「知り合い同士」のみに閉じて発生 TAWS-UGによって、未知の有識者間の直接の繋がりが促進され、課題解決が加速



自社で利用しているAWS環境で、Amazon Connectで外線の着信を行いたいのですが、東京リージョンで電話番号を登録すると以下の書類が必要とのことです。申請者の情報は何とかなるとして、会社の書類（公共料金の請求書など）はど

<お客様にご用意いただく必要のある書類>

- ・申請者の行政機関発行の有効なご本人様確認書類（運転免許証、パスポートなど）
 - ・申請者と企業の関連性を示すドキュメント（社員証や、その他所属書類など）
 - ・貴社の住所が記載されている書類（公共料金の請求書、企業登録証明書、地方税に関する証明書（納税証明書など）、社会保険料の領収書などの書類）
- *03番号のご取得をご希望の場合は、貴社の住所が記載されている書類がごございます。

簡易表示

すべて折りたたむ



過去、他のお客様の事例ですが、会社の所在証明として「現在事項全部証明」TISの場合は、探してみた限りですが、下記で取得できるのではないかと思います。一度、ご相談いただくのが良さそうです。



CodePipelineを利用したFarqateへのデプロイの際のヘルスチェック猶予期間変更について お疲れさまです。

現在CodePipeline・CodeDeploy(ECS B/Gデプロイ)を利用してFarqateへのCICD環境を構築しています。
今稼働しているプログラムが大きくなってきて起動完了までに時間がかかっています。
そのためヘルスチェックが通る時間がヘルスチェック猶予期間(デフォルト240秒)を超えていてFarqateが起動を繰り返すような挙動になっています。
手動でCodeDeployを実行する際にコンソールからヘルスチェック猶予期間を300秒に変更したあとはデプロイ可能になったのですが、できれば手動での変更は避けたいと考えています。appspec.yamlやtaskdef.jsonやその他設定ファイルからこちらの設定を変更することは可能でしょうか？自分でも調査しましたが該当の項目が見つけれなかったため今回質問させていただきました。コンソールですと以下の項目になります。

ヘルスチェックの猶予期間

サービスのタスクで、ELBヘルスチェックを開始して応答するまでに時間がかかる場合は、ヘルスチェックの猶予期間として最大2,147,483,647秒まで指定できます。この間は、ECSサービスケジューラはELBヘルスチェックのステータスを無視します。この猶予期間により、ECSサービスケジューラがタスクを異常とマークして時間より前に停止することがなくなります。これが有効であるのは、ロードバランサーを使用するようにサービスが設定されている場合のみです。

ヘルスチェックの猶予期間

得られた情報を
「AWS Navigator」に蓄積して好循環

<https://docs.aws.amazon.com/cli/latest/reference/ecs/update-service.html>

認定試験などの**学習コンテンツ**は、**Teams**で約**2000人**に**ブロードキャスト**
エグゼクティブがいきなり模擬試験を作り始める！想像を超えた化学反応が発生



Exam Readness的情報の集まり

■「AWS Solutions Architect – Associate」試験限定の半額バウチャーが利用できます。
[詳細はこちらをご覧ください](#)

AWS 責任分担モデル (38問)

オリジナルのクイズマシーンが完成！

1. 責任分担モデルでは、顧客が責任を負うのは次のうちどれですか？
(5点)



※注1：事業部で2番目に偉い人です

※注2：事業部で一番偉い人です

トラブル対応に必要なナレッジを全社共有（メンション付き報知で効果抜群） AWSのサービスで障害が発生した時は、Teamsで即座に通知

障害対応編

障害対応の考え方・取り組み方

この資料では「そもそも障害対応では何をするのか」「AWSのサービス障害時にサポートをどう使えば良いのか」「AWSのサービス障害に備えて知っておくべき責任共有モデルとSLAの考え方」「我々ができる対策とは何か」などを、詳しく解説しています。

全体に向けて対策術を啓蒙



AWSを利用したシステムの障害に備えて

2022/01

TIS株式会社
IT基盤技術事業本部
IT基盤技術事業部

© 2021 TIS Inc.

スライド 1/75

振り返りによる
アップデート

自動で通知 (AWS Health Aware)



AWS Service Health Dashboard 01/18 0:16

[NEW] AWS Health reported an issue with the EC2 service in the AP-NORTHEAST-2 region.

Account(s)	All accounts in region
Resource(s)	All resources in region
Service	EC2
Region	ap-northeast-2
Start Time (UTC)	2022-01-17 15:15:00
Status	open

さらに、CCoEが復旧方法を解説

- AutoRecoveryが未設定のEC2についてはPJ単位で監視されている場合は検知できますが、監視されていない場合、検知ができていない可能性があります
- AutoRecoveryの失敗に気づき、手動でStartを試みても、全域障害の為失敗する場合がある
※上記対応で成功したものは正常稼働に戻る

■ ELB

API実行時のエラーレートが上昇

★影響確認方法

次の画面を参考に、サブネットが「APNE1-AZ1」に該当するかご確認ください。

AZ-A/B/C/Dではなく、必ずIDを確認してください。

該当するサブネットが発見された場合、そのサブネット上のEC2インスタンスは影響を受けている可能性があります。

サブネット (1/7) 66

アクション

サブネットを再取得

サブネットをフィルタ

大企業であればあるほど、縦割り組織によって、ナレッジや人的交流の隔たりが発生しやすいのではないのでしょうか。

しかし、CCoEと社内技術者コミュニティができれば、

- 各組織のナレッジを一箇所に集め、再配布することができます
- 絶対に伝えたい情報を、大人数に一斉報知できます
- 全員に守らせたいものを、全員で守れるようになりメンバへの意識付けもできるようになります
- 組織を超えた交流が生まれ、社内が元気になります！

第2部

**CCoEと技術者コミュニティが、DX推進の鍵になる！
ユーザー企業の内製化支援事例をご紹介します**

中澤 義之 (なかざわ よしゆき)

TIS株式会社 IT基盤技術事業本部

IT基盤コンサルティング部 シニアテクニカルエキスパート

2021 APN AWS Top Engineers 選出

経歴

- 2001年4月 TIS入社
- 2001年4月～ インフラエンジニアとして多数のプロジェクトを実施
- 2010年4月～ GDC御殿山 NWサービスの企画・開発
- 2011年11月～ 自社クラウドサービス (TEOS) の運用・保守、新サービスの企画・開発
- 2014年4月～ クラウドサービスプリセールスとして自社／他社クラウドのプリセールス及びアーキテクトを実施
- 2016年7月～ AWSビジネス推進担当として、お客様及び自社のクラウドサービス利用の促進を牽引
- 2020年4月～ クラウドコンサルティングビジネス推進

資格等

- ・2020-2021 APN AWS Top Engineers
- ・AWS Well-Architected リード



2021 APN AWS Top Engineer



第1部でご紹介した取り組みなどから、TISではAWSを活用し、DX推進や内製化を目指すユーザー企業からの“CCoE 設立”や“エンジニア育成”に関するご相談を数多くいただいております。

第2部では、実際の事例をもとに、内製化を目指す上でのよくある課題やTISの伴走支援についてご紹介します。

	課題	<ul style="list-style-type: none">• DXを推進したいお客様のニーズ• 技術力不足をはじめとした内製化への悩み
	事例	<ul style="list-style-type: none">• CCoE設立支援• PJ（PMO）支援• アドバイザリ
	解決	<ul style="list-style-type: none">• AWS活用内製化支援サービス

DXを推進したいお客様のニーズ

経済産業省「DXレポート」曰く

「**新しい製品やサービス、新しいビジネス・モデルを通して**
（中略）競争上の優位性を確立すること」とDXを定義し、

「**企業が生き残るための鍵は（中略）ITを強力に生かせるかにかかっています。**」
と結んでいる。

引用：経済産業省「DXレポート ～ITシステム「2025年の崖」克服とDXの本格的な展開～」

これを聞いた企業がどうなるか…（あくまで一例です）

DX推進だ！



経営者

考えろ



現場

どうしろと

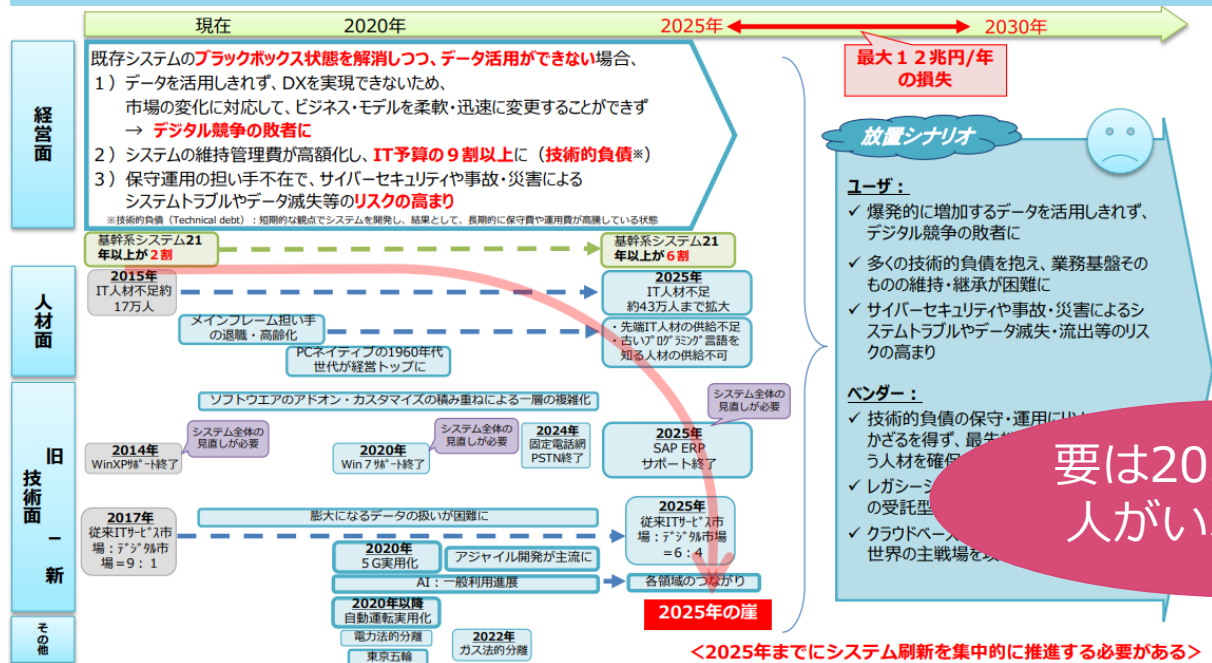
しかも、DX推進の裏で人材不足が予見されている

2025年の崖

多くの経営者が、将来の成長、競争力強化のために、新たなデジタル技術を活用して新たなビジネス・モデルを創出・柔軟に改変するデジタル・トランスフォーメーション(=DX)の必要性について理解しているが...

- ・ 既存システムが、事業部門ごとに構築されて、全社横断的なデータ活用ができなかったり、過剰なカスタマイズがなされているなどにより、複雑化・ブラックボックス化
- ・ 経営者がDXを望んでも、データ活用のために上記のような既存システムの問題を解決し、そのためには業務自体の見直しも求められる中(=経営改革そのもの)、現場サイドの抵抗も大きく、いかにこれを実行するかが課題となっている

→ この課題を克服できない場合、DXが実現できないのみでなく、2025年以降、最大1.2兆円/年(現在の約3倍)の経済損失が生じる可能性(2025年の崖)。



<2025年までにシステム刷新を集中的に推進する必要がある>



<経営の悩み>

- ・ 経営層と現場の認識ギャップ
- ・ スピード不足
- ・ コスト不明瞭



<現場の悩み>

- ・ AWSに対する知識/経験不足
- ・ スキルアップ/リスキングの壁
- ・ クラウドにおける不安

募集要項



- ・業種業務のアプリ経験あり！
- ・AWSの知識は抜群！構築実績あり！！
- ・保守運用も対応可能！！
- ・他部署とのコミュニケーションもお任せあれ！！！！

(現実) そんな人、やってくることはありません…





- ・ **オンプレ**に対応していた人材はいるが、**AWSは未経験**
- ・ **既存システム**の対応で**手いっぱい**
- ・ **新しい領域（AWS）**への対応まで**手が回らない**
- ・ 既存システムは、ベンダが見ているので**中身がわからない**

.etc

言語化すると「やればいい」だけにみえるが、実際にやってみると



先の見えない道



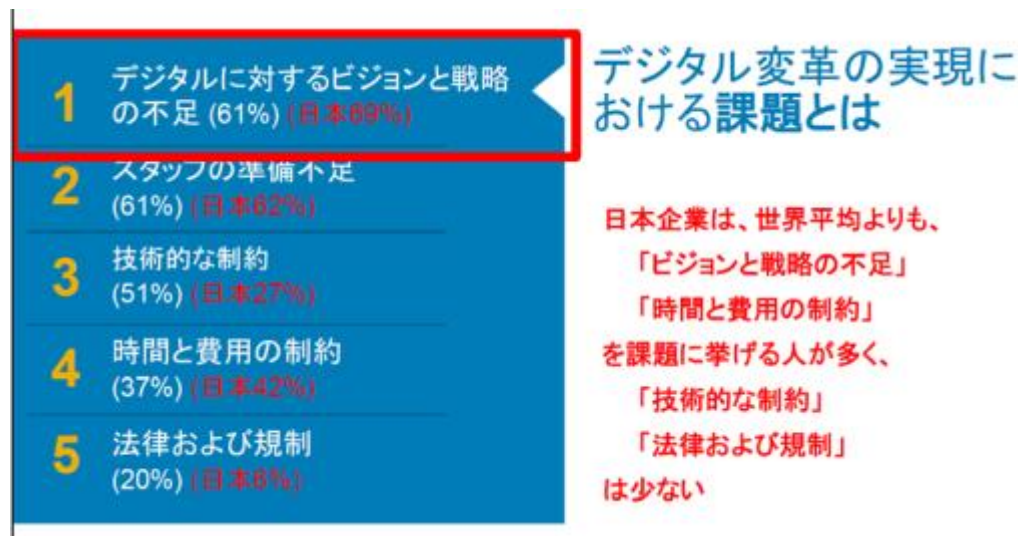
果てしない壁



見えない山の頂

では、どこで行き詰ることが多いのか？

再び、経産省DXレポートより抜粋



ビジョンと戦略を描き、時間とコストを捻出すれば、進むことができるのでは？



- ①ゴールを設定し、
- ②行きつくまでの道を描き、マイルストーンを置き迷わぬよう
- ③伴走しながら、一緒に壁を乗り越える

それがTISの考える内製化支援です

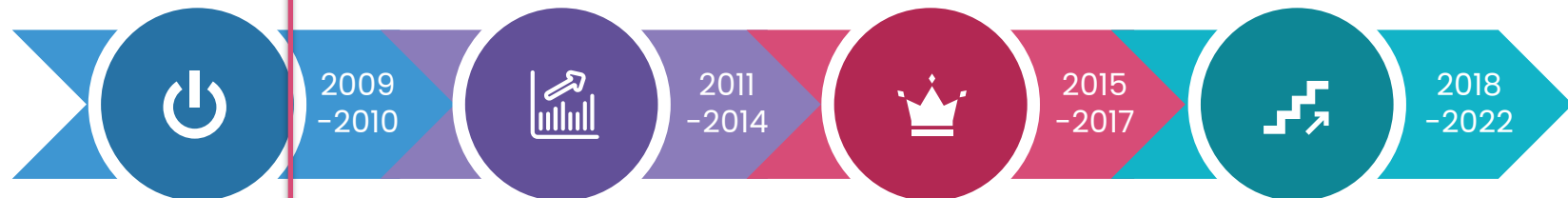
昨年より“AWS活用内製化支援サービス”を提供開始

2009年: AWSを利用した初の開発プロジェクト

- 2012: AWSパートナーアワード初受賞
- 2014: サーバ数百台規模となる大規模移行案件始動

2015年: AWSプレミアコンサルティングパートナー(※)に認定

- 2018: AWS 金融コンピテンシー取得
- 2019: 「セキュリティプリセット」提供開始
- 2020: AWS 移行コンピテンシー取得
高可用ソフトウェアスタック「Lerna」公開



- 2016: AWS SAPコンピテンシー取得
- 2017: 金融 (カード・銀行等) のAWS導入支援が本格化

2018年～: 社内でAWS技術者コミュニティが始動 「APN Ambassadors」に社員が初選出

- 2021～2022
AWSセキュリティ
コンピテンシー取得

自社サービス基盤への
AWSの採用が本格化

＜この裏で何を行っていたか？＞

- ・AWSを利用するうえでのルールの方策
- ・エンジニアの育成支援
- ・プロジェクトの実行支援
- ・情報共有/啓蒙活動

TISが歩んできた道のりをお客様に還元

内製化支援 サービス始動

本日特にご紹介したいポイントは…

課題整理・組織構築支援	推進メンバ育成支援	開発・運用支援
<ul style="list-style-type: none">組織課題発掘ディスカッションWell-Architected 理解深耕読書会Cloud Adoption Framework (CAF) に基づいた組織計画・推進計画CCoE設立支援DX推進ロードマップ作成支援	<ul style="list-style-type: none">AWSトレーニング・ハンズオン開催AWSアドバイザリーサービスAWS認定試験対策お客様社内向け育成資料の整備支援PoC支援	<ul style="list-style-type: none">クラウド利用ガイドライン作成Well-Architected コンサルティング移行ロードマップコンサルティングTCO評価コンサルティング運用・監視サービスクラウドデザインアセスメント障害対応運用構築支援



CCoE立ち上げ支援

- 組織としての役割を明確に



PJ支援（PMO）

- 具体的なシステムのクラウド活用を技術的に推進支援



アドバイザリ

- 困ったときの相談役



お客様事例：内製化へ向けた伴走支援

CCoE立ち上げ支援

<背景・課題>

- ・ AWSの利用は開始している
- ・ DXを推進していくうえで、さらなる活用が必要と判断
- ・ CCoEを立ち上げることで推進力を強化したい

<対応した事項>

- ・ 組織と役割の整理
- ・ 持続できる仕組みを経営層と合意
- ・ プロジェクトを支援し、成功実績を積み上げ
- ・ 育成、情報共有、啓蒙

<成果>

- ・ 主体はあくまでもお客様にあるという自覚ができた
- ・ お客様の事情や実情を踏まえた支援を行うことで、お客様自ら推進できる状態になった

PJ支援（PMO）

<背景・課題>

- ・システムはベンダにすべて任せている状況
- ・既存ベンダは、クラウドに不慣れでありトップダウンでのAWS化に不安
- ・お客様による、管理統制を強化したい

<対応した事項>

- ・お客様に対するトレーニングと啓蒙
- ・ベンダに対する技術支援
- ・AWS利用における過去事例／ノウハウを提供

<成果>

- ・お客様、ベンダともにAWSスキルが向上
- ・小さなチャレンジを積み重ねることで、PJとしても成功（成功体験）
- ・横展開に向けたパイロットプロジェクトに位置付けられた

アドバイザー

<背景・課題>

- ・手探りでAWS上のシステム開発を行っている
- ・網羅性に不安がある
- ・よりよい選択肢や事例を求めている

<対応した事項>

- ・全体像の説明と情報提供
- ・ベストプラクティスとノウハウの提供
- ・個別システムにおける技術支援

<成果>

- ・網羅性を担保することでシステム品質の底上げ
- ・単一システムから複数システムへの情報展開と効率性の向上

DXの進め方やAWS活用、内製化への取り組みなどTISのノウハウをうまく活用していただき、お客様の成長につなげていただきたい。

- ・ TISが実際に運用して成功している
仕組みやノウハウをお客様にご提供します
- ・ DXへ向けてシステム内製化を目指すお客様に対して
ゴールを設定し、ゴールまでの道を描き
マイルストーンを置きながら伴走します

一緒に崖を飛び越えましょう



ITで、社会の願い叶えよう。



TIS INTEC
Group

Thank you!

横井 公紀

TIS株式会社

IT基盤技術事業本部 IT基盤技術事業部

IT基盤ビジネス推進部

主査

中澤 義之

TIS株式会社

IT基盤技術事業本部 IT基盤技術事業部

IT基盤コンサルティング部

シニアテクニカルエキスパート

